
金盞花の残り香

ヴォックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金盞花の残り香

【Nコード】

N4565F

【作者名】

ヴォックス

【あらすじ】

休日が来る度、熙漸はある家に向かう。暗い表情で金盞花を持って。……少し切なめ。前作よりオリジナル性強し。

プロローグ

「……またどやされるな」

姿見に映った自分をちらりと見て、溜め息をつく。上等な麻の着物に身を包んだ、クリーム色の髪の毛、表情の暗い男。こんな顔で行ったら、また文句を言われるに決まってる。

幾度頬を叩いても、その表情は崩れない。

「仕方ねーな」

諦めた様に呟くと、刀を腰に刺し、灯峰熙漸は自室を出た。

瀟霊廷を出て流魂街に足を踏み入れる。

東流魂街二番地区、^{キヘイカン}『貴平桓』。勝里と霧穂の地元。
一番地区^{ワチンドリ}『和点西』から『貴平桓』に入って直ぐの所に、目的の場所是在る。

その店が視界に入り、俺が片手を上げると、花屋『葉木』の店主が応えた。

「お、久し振りだね」

「ご無沙汰してます。いつものを」

「はいよ。少し待ってな」

店主が店の奥へと姿を消している間、掲げられた店の看板を見てし

ばし感傷に浸る。

『良い花屋、知んねーか？』

俺がそう言つと、赤髪を後ろで束ねた女性、霧穂は大袈裟に驚いた。

『花！？あんたが？そんな趣味あつたつけ？』

『うつせーな、悪いかよ』

『珍しいわねー……なんで私に？』

『霧穂ぐらいしか聞ける奴居ねえんだよ』

親友の事を悪く言つつもりは無いが、正直勝里はこういう事には疎い。俺の知っている中で1番詳しくそうなのは、霧穂だった。

『花屋ねえ……瀟霊廷にもあるでしょ？“何とか家御用達ー”みた
いな』

『あるにはあるんだけど……イマイチ違つていうか……』

『ふーん、そつか。私が知ってるのは一店だけよ。流魂街の地元に
……あ』

『何だよ？』

『あーんまり死神とか貴族に好感持つてないわよ？』

『そんな事はとうの昔に諦めてるよ』

流魂街の見回りや、勝里や霧穂の地元に行った時に、住民の冷たい
目が気になったもんだ。今はもう慣れたが、あまり気分の良いもの
じゃない。

『場所へ行ったら直ぐに分かるわ。店の名前は』

初めてこの店に来た時は、歓迎とは程遠い反応だった。霧穂の友人
だと言つと幾分マシになったが、やがて通い続ける内に心を開いて
くれた。

今ではすっかり常連客だ。

奥から出て来た店主の手には、数本のオレンジ色の花。

「ほい、金盞花を6本でいいな？」

「ああ、ありがとうよ。勘定だ」

花を受け取り、店主の手に数銭を落とす。

何を思ったのか、店主は空いた方の手で俺の額を軽く小突いた。

「あだっ！何すんだよ！」右手で額を抑えながら店主の顔を見ると、静かに微笑んでいた。

「キザン君が来る時はいつも暗い顔だね。ま、花屋に来るのはみんな笑顔、なんて言わないけどね」

「……どーしよーも無いんですよ、これは」

寂しそうな笑顔で返した熙漸を見て、店主は奥から白い花を一本持ってきて来た。

「これは君にだ」

「どうも。幾らっすか？」

「サービスだよ、サービス。いつも鼻屑にしてくれてるからね」

「あ……ありがとうございます」

店主に礼を言い、流魂街を後にする。

瞬歩を使えば瀟靈廷まで直ぐに着くが、花を携えている時にそんな野暮な事はしない。

すっかり鼻に馴染んだ金盞花の匂いを嗅ぎながら、“そこ”へと向かう。

休暇の二回に一度は必ず訪ねると決めている、俺の日課。

俺の家より幾分大きな、櫓で出来た立派な門の前に立つ。

『菰田実』と書かれた表札の掛かった家。

全てが夢であればいいのに、と思う。

この門の前に立つ度、金盞花の香りを嗅ぐ度、葉木に向かう度、休日が来る度。

自分が嫌になる。

帰りたくなる心を、金盞花の香りが抑える。この花は、“あの人”が好きな花だ。これを届けるのは、自身に課せた課題だ。

門を叩き、来訪を告げる。

「熙漸です」

一 出会い

通されたのは小さな部屋だった。

横を見ると、不安と期待の入り交じったような表情をした数人の男女。落ち着けずにそわそわと周りを見回したり、正座をぎこちなく組み直したりしている。

……まあ、俺も人の事を言えた立場じゃないが。

まだ袖を通して日が立たない、この死覇装。

幸い霊術院を卒業するまでに斬魄刀の名は知ったが、それもまだまだ。雷虎には、未だ嘗められてる節が多々ある。

此処に通されて何十分も経っている気さえするが、実際はどうなのだろうか？

隊長を連れて来るまで待っていると隊員に言われたが、それにしては長い。

俺達のことを忘れているのか！？と、嫌な想像すら浮かぶ。流石にそれは無いか。ていうか、俺が入ったのが新人隊員の事を忘れるような隊なら、とんでもなくツイてない。

そんなくだらない事を考えていた時。遠くから騒々しい声が聞こえ、皆一様に姿勢が堅くなる。

「あんのバカ狐はこんな時に何処行つてんのよ！」

「市丸隊長は霊圧を消されているので……菰田実副隊長に分からなければ我々には何とも……」

声から察するに、男性とその上官の女性らしい。

「つたく！……あ、ここ？」

「はい」

足音が部屋の前で止まると、ガタンと粗雑に障子が開けられる。

そこに立っていたのは、艶のある長い黒髪を、後ろにストレートで下ろした綺麗な女性だった。

横にはごつい体型の男が大量の刀を抱えていた。

誰かと思う前に、女性の左腕の副官章が目に入る。

副隊長……！

霊術院で護挺十三隊の全隊長の顔は覚えていたが、副隊長については全くの無知だった。

こんな綺麗な人も居んだな……

副隊長はちらりと新入隊員を見回すと、口を開いた。

「この副隊長の菰田実流華よ。よろしく！」

「「はあ……」」

「暗い」

あっさりと吐き捨てると、後ろの男の方を振り向く。

「ま、剣でも渡せばちよつとはテンション上がるでしょ……ふーん」
新入隊員のそれぞれの姿を見ていき、俺の所で目を止める。

「あんたは自分の斬魄刀持ってるのね、上々！席官入りは確定ね」
驚き、顔を上げる。

「本当ですか！？」

「お、やる気出た？」

「いや、最初っからあります」

「口応えしない」

いきなり俺の頭をわし掴みにし、ガクンと下げる。

「あだっ！……すいません」

「ま、いいか。河城、とっと『浅打』配っちゃって」

「はい」

後ろの河城と呼ばれたごつい男が腕に抱えていた刀を一本ずつ渡していく。

『浅打』は、まだ自分の斬魄刀を修得していない隊員に配られる、名の無い刀の総称だ。

斬魄との対話が進めば、『浅打』は固有の形へと姿を変える。

河城が刀を配っている間に、流華副隊長が脇に挟んでいた紙を全員に渡す。

「ウチの隊の席官表。本当はちゃんとした顔合わせとかするべきなんだけどね……ま、頭入れときなさい」

「はい！」

新入隊員が一斉に答え、各々受け取った書面に目を落とす。

1番上には『隊長 市丸ギン』。これだけの席官の上に名前があると、流石に壮観だ。改めてトップに立っている人だと痛感する。

その下には目の前の『副隊長 菰田実流華』。

そしてその下に……『第三席 吉良イヅル』。

「！……イヅル……」

凄え。もう三席か。たった一期分しか違うのに、もうこの差か。絶対追い付いてやる……いや、抜いてやる。

「ん？吉良君と知り合い？」

「え？」

喋ったつもりは無かったが、声が出ていたらしい。

「はい、まあ。幼馴染みです」

「へえ……あの子も友達いるのね」

「ははは……まあ」

イズルは、まあ、あれだ。何とも言えん。

「じゃ、ちょっと来なさい。腕見てあげるわ」

「あ、はい！」

二 気疲れ

踵を返し歩き始めた流華副隊長を見て、慌てて立ち上がる。

流華副隊長の後ろから付いて行きながら、これから世話になる隊舎内をきよろきよろと見回す。

たまに書類を抱えた隊員が通り過ぎる度に、流華副隊長と挨拶が交わされている。隊内での規律はしっかりしているらしい。

あ……でもさつき市丸隊長が居ないとかで一悶着あったな。隊長より副隊長がしっかりしているのか。

「あ、ちよつと待っててね」

ボーツとしていたので、いきなりの副隊長の声に少し反応が遅れる。

「え……あ、はい」

流華副隊長が一つの部屋に入って行くのを目で追う。やがて視線は部屋の名が書かれた板に吸い寄せられる。

「『隊首室』！？」

思ってもいなかった文字が目に入り、そのまま声に出る。いや、隊首室があるのは当たり前だが、自分がそんな所に居るとは全く念頭に無かった。

「お待たせ」

隊首室から出て来た流副隊長の右手には橙の果実が転がっていた。

「柿……ですか？」

「そ。もともと隊長の好物なんだけどね。ハマっちゃったのよ、私も」

しばらく右手の上で転がしたり跳ねさせたりを繰り返していたが、柿を口に持って行った時、それが消えた。

「『バカ狐』やなんて酷いやないの」

突然後ろから声がし、振り返ると、数分前に紙上で名を見た人が居た。

「いつ、市丸隊長！」

「盗聴なんて趣味悪いですよ、隊長。あとそれ私のんですけど」
流華副隊長が市丸隊長の手の中の干し柿を指す。

消えたように見えたのは、市丸隊長が瞬歩を使って奪ったかららしい。早過ぎて、全く見えなかった。

「その子新入り？……ふーん、中々可愛いやないの」

「は、はあ……」

「新入りからかうのも大概にして下さい。変質者に聞こえますよ。あとそれ私のお菓子なんですけど」

「『変質者』やなんて酷いやないの。君、名前は？」

「はっ、灯峰熙漸です」

「ヒミネ……聞いた事が……無いわな、そら」

「当たり前です。で、返せ」

もはや敬語を棄てた副隊長が掌を差し出す。

「取ってみる？流華ちゃん」

ヒュッ

一瞬にして副隊長の姿が掻き消え、次の瞬間にはその右手に柿がしっかりと握られていた。

「あらら、ホンマに取りなはった」

全く変わらない表情で市丸隊長が驚く。

「干し柿は私の一週間に一度の至福の時です。だいたい、自分のがあるじゃないですか」

「人のもんを食べるから美味しいんじゃないの」

「悪趣味」

市丸隊長が笑みを全く崩さずに眉を吊り上げる。

「今日はいつもよりえらい酷いね、流華ちゃん」

「さつきから隊長が悪口しか反応しないからです」

「え？そうかいな？」

「はあ……隊長の弱みを握ったら絶対一生こき使ってやるのに」

「……弱みが無かったら作ればエエんや」

「はい？」

「じゃ、よろしゅうな灯峰くん」

「は、はい！」

俺が答えるか答えないかという内に、市丸隊長の姿が消えた。

「最後なんか嫌な事言わなかった？隊長」

「え？そですか？」

「いや……まあいいんだけど……なんか時間食っちゃったわね。行きましょ」

「は、はい」

やっと柿にありつけた流華副隊長が笑顔で歩き始め、慌ててその後を追う。

「えーっと……ここはどこですか？」

地面が剥き出しの岩地を見て、流華副隊長に尋ねる。

「第二修業場よ」

「『第二』、ですか？」

「そ。普通の稽古は道場でするんだけど、斬魄刀の開放や鬼道の鍛練はここでするの。道場なんかでやったら吹っ飛ぶでしょ？」

「成る程」

「さてと」

柿のヘタを投げ捨て、掌に残った柿の甘味を嘗め終えた副隊長が刀を抜く。

「じゃ、来なさい。全力で」「……はい」

黄を帯びた刀がゆつくりと鞘を滑る。渴いた唇の端を嘗め、刀の名を呼ばんと口を開く。

「はいストップ！」

左の掌を熙漸に向ける。

「はっ……はっ……はっ……はい……」

肩で荒く息をしながら刀を納め、その場にどさりと寝転ぶ。

「まあ上々ね。だけど単純に筋力が無い！」

「う………すみません」

「ど・う・せ、静霊挺出身でしょ？」

わざわざ驚くのものにも疲れ、寝転んだまま顔を副隊長の方へ向ける。流華副隊長は片手で斬魄刀をくるくると回して遊んでいた。

「当たりです」

「ふーん、そ。最近は流魂街出身も根性あるわよ？」

「はあ……」

しばらく待ったが何も言わなかったなので、他愛のない質問を尋ねる。

「流華副隊長は流魂街出身ですか？」俺がそう言つと、なぜか副隊長はニヤリと笑った。

「ふーん……いきなり私を名前で呼ぶのね？」

「！すいません！なんか……性分で」

これは本当だ。人見知りするクセに人を初対面で下の名で呼ぶ為、（??）という顔をされる事が多い。

“勝里”っていう中途半端なヤツにも、『お前、中途半端だ……』とあつさりと言われた。勝里については追い追い説明する、かと思う。

「ま、いいわいいわよ。そういう男、嫌いじゃないし」

「！」

自分でも顔が火照るのが分かる。

「顔が赤いわよ？」

流華副隊長がニヤニヤ笑いながら俺の顔を覗き込み、額に竹筒を当てた。

「冷っ！」

「水筒よ、体冷やしな」

「あ、はい」

水筒の栓を抜くと、途端に喉が渴いてくる。体を起こし、一気に流し込む。熱を帯びた身体には心地好い。

がぶがぶと水を飲んでいると、副隊長が口を開いた。

「さっきの質問だけど、私は静霊挺出身よ」

飲み干し、空になった所で栓をして向き直る。

「！そうなんですか。……これ、ありがとうございます」
礼を言つて軽くなつた水筒を渡す。

「しっかし……よく飲んだわね」

「副隊長が強くて、疲れたんですよ」

「お世辞はいいわよ……あれ？」「どうしました？」

「名前聞いてなかったわよね？」

「灯峰、熙漸です」

「ふーん……キザンキザン……キザね」

「は？」

意味が分からず聞き返すと、流華副隊長はニヤツと笑つた。

「あだ名よ、灯峰キザ君」

「……勘弁して下さい」

俺の疲れきつた言葉を無視して、流華副隊長が歩き出す。

「さ、帰りましょ」

渋々立ち上がり、副隊長の後に続く。

「あ」

「どうかしましたか？」

短い言葉と共に足を止めた副隊長を怪訝そうに見つめると、例のニヤニヤ笑いをしながら振り返つた。

その表情のまま空の水筒を振る。

「間接キス」

「なっ！？」

瞬間、意味が分からず、俺は固まつた。

「ウ・ソ・よ、キザ君 これからよろしく」

「.....
敵わねえ.....」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4565f/>

金盞花の残り香

2010年10月9日02時50分発行